

Top Interview

トップインタビュー

— 変革に挑む —

まとめ／堀水潤一 撮影／内井隆晶

情報の善し悪しを 正しく見極め 扱える人間を育てたい

東

京情報大学の創立は1988年。「情報」の文字を冠した大学の先駆けです。PCやネットという

意味での情報は、今では当たり前の社会インフラとして根付いています。本学でもiPadなどの端末持参で会議に出席し、その場で情報を引き出す教職員の姿も普通にみられます。クラウドコンピューティングなど、情報環境は今後も急速に進化していくでしょう。

一方で、私は大船渡出身ですが、今般の東日本大震災では、自然の驚異とともに情報基盤の脆弱さをみせつけられました。安否や避難先など生死にかかわる情報が必ずしも必要な人に届かず、情報学を扱う者として重い課題を突き付けられた気がします。

もとより、情報リテラシーの問題など、あらためて情報を学ぶ意味が大きい時代だと痛感しています。パソコンを

ひらけば虚実入り混じった情報の海。求めようとすれば無数の答えがあるわけです。それをいかに受け止め、評価し、取捨選択しながら自分のものとするか。相手と直接対面しないだけに、どうつきあいながら人間らしく生きていくか。情報倫理が問われるのです。情報の善玉と悪玉を正しく見極め、うまくコントロールしながら扱える人間を育てたいと思います。

本学は総合情報学部のみ単科大学ですが、扱う領域は多岐にわたります。情報を学ぶというと、システム開発をイメージするかもしれませんが、環境

やビジネス、文化など、あらゆる領域を扱います。他学科の講義も受講可能

であり、学科の枠にとらわれません。こうした学科横断型であることは研究でも同様です。例えば、文科省採択の大型プロジェクト「アジア東岸域の環境とそれに依存する経済・社会圏の持続的発展のための総合研究」がそう。NASAの衛星データを活用し、東アジア全域の気候変動などを観測するこの研究には、環境情報学科を中心に、全学科の教員がそれぞれの視点で参加しています。研究の目的は、人間の経済活動などが自然環境に与える影響を読み取り、地球環境の修復や、社会システムの構築につなげることに。わば、情報をさまざまな角度から分析し、自然との共生を考える研究です。

学生たちには、こうした研究などからも、情報を学ぶ面白さを感じてもらいたい。高大連携の取り組みに力を入れ、年間60校近くの高校で「PCの分解・組立て」「地球温暖化」「投資と会計」などの授業を行っているのもそのためです。ぜひ情報の魅力に触れてください。興味と動機をもって入学した学生は、その後の伸びがまったく違ってきます。今後も、意欲ある学生に期待しています。

東京情報大学 学長 新沼勝利



【学長プロフィール】にいぬま かつとし●1941年生まれ。東京農業大学農学部卒業、同大学院農学研究科農業経済学専攻博士課程修了。東京農業大学教授、学校法人東京農業大学常務理事などを経て、2007年より現職。日本農業経済学会理事、日本農業経営学会理事、実践総合農学会理事、財団法人海外農業教育研究開発協会理事などを歴任。

【大学プロフィール】1988年開学。設置者は学校法人東京農業大学。総合情報学部(情報ビジネス学科、環境情報学科、情報システム学科、情報文化学科)。卒業生総数は1万人超。